猿妻石叢書第34号

高松寺考

溪　韻　子

はしがき

本編は同志小原無学氏が高松寺（現花巻市高松在）の復興者、渡辺宥京師（新高松寺住職）のために、該高松寺の故事来正より、現在に至る迄の経緯と、灵木高松と、附近の名所旧蹟の諱り等を取り纏めたもので、本町北成島の毘沙門堂を距る三基米の近接地にあり、然かも同時代に繁栄せしかと思はるゝ巨刹高松寺の事跡なので之を知る事も同志を益する所も多からうと思はれたので、両氏の諒解を得て、本誌に輯録する事にした。

「溪韻生」

一、古霊場高松寺の草創

高松寺の草創年代は詳かでない、真言古規の寺で、往古繁昌した寺であったと云ひ伝えられていることは、西大坊跡、日向坊跡、ならび坊跡、本坊跡、東大坊跡等今畑地になっているのを見ても其当時繁昌したことが察せられる。

又この山にある、七不思議の名所の一つ、一字一石の経塚から、堀り出された、白磁の瓶は支那製のもので、鎌倉初期のものと見られる点から考えても、少くも平安時代から、開かれた寺であったことが推察される。

又享保七年（一七二二）に書かれた、花巻古事記に、足利高氏が高松寺に、寺領四百石を寄附した黒印を口内の人が見たとあることも、当時高松寺の繁栄を物語るものと思はれる

二、高松寺七不思議の名所

七不思議の名所は、一字一石の経塚、綱森、鉞（まさかり）塚、笊石、志願の窓、男松女松、小鵜ヶ清水の七つで、一字一石の経塚は、峯の男松女松の二本の大木の間にあるが、大正初年頃、誰かに発堀され底から出た、白磁の瓶が、その辺に捨てられてあった。又一寸五分位の平らな小石に、お経の文字一字ずつ書いたものも、その辺に堀り散らされて

股に似た枝のある大木である、小鵜が清水は、山の麓平屋敷の向ふにあって、櫻の古木の根元から湧く清水で、いかなる旱魃にも、水の減じたことがないと云はれている。鵜は桃花鳥とも書き、背は灰色で翅の裏は紅い色をしている鳥である。初櫻の、清水に映って紅いのでこの名がつけられたのであらうか。志願の窓は、岩根神社から、左の方へ少し登ると、新しい少さい観音堂がある。その後ろの高い処に、志願の窓がある。これは大古の礫岩が長い間自然に風雨にさらされて云はゆる天工、神工の彫刻の如く、形成された、実に天下無類の奇岩怪石で、頗る見事なものである。高さ八尺位、周囲二間四方位の岩石で、岩の上に笠石をおいた様になっており、その笠石と岩の間に、小窓があって、向ふを覗くことが出来る。当国三十三番の札所十七番の御詠歌に、

思ひきや志願の窓に月ぞすむ青く照す松の葉の露

とあるはこれである。

大昔高松山の峯の大木の精灵は、諸願応せずと

いふことなく、四方の諸民に崇拝された・時の天聴にも達して石の鳥居も建てられたことがあったその鳥居のあとであるとの伝説はこゝのことである・

三、高松山の大木のあと

志願の窓より峯に登ると、男松女松があり、その間に一字一石の経塚があり　なほ峯伝に頂上に登ると、北方より西方にかけて眺望頗る絶佳で、胡四王山はすぐ眼下に見おろされ　実に人をして爽快元もいえぬ天辺の境地に立たせられる感がする・その頂上の少し下方に五六間四方のくぼんだ処は、高松の霊木の生いた処である・二代目の高松も切られて、今は二抱えばかりの切株は残って居り、すぐ側に三代目の若松が植えられている・

松の伝説に「昔いつの頃であったか、高松村に美人があった・それは、小野の小町は秋田の小野村から召出され、泉式部は横川目村から召出された様に、宮廷に召出されて、高松女御となった・その女御によって、高松の霊木のことが天聴にも達して、石の鳥居も建てられたが、後に女御が病気にかかって医薬のみならず、祈禱師や、占師にもかかった所　古い高松のたゝりと占われて、その高松を伐れとの勅命が下った・その伐採の時使用した鉞や鋼を埋めた処が　鉞塚や、鋼森となったなど色々の伝説がある

四、高松寺山火事のため全焼

いつのことか分らないが、矢沢の火の口より、山火事起り、それに烈風加はり、猛火となって高松山まで延焼し　胡四王堂一つ残して、矢沢山高松山の神社仏閣悉く烏有に帰した・古未栄えて来た、高松寺の大加藍及諸坊諸堂皆灰燼となってしまったことは、誠に惜しいことであった・其後幾度となく、再興の計畫が待ちあがっても、機を失してしまひ　徒らに年月を経過して、さしもの古霊場も荒れにあれてしまった・

五、高松寺及観音堂を鞍掛に再興した

鞍掛の地に高松寺の壇家で、特志家である・大富豪の人があって、卒先高松寺の再興を計画し、地所や、金品を提供し、堂閣及仏像を寄進し旧壇家に呼びかけたので全く何百年と荒廃に帰した。

高松寺及観音堂が立派に出来上ったものである。

さて旧寺跡に再建しないで、特に鞍掛の地を選んだ訳は　そこに大富豪があった外に美人高松女御は鞍掛に出生し（九十翁渡部直吉説）最初の観音堂の本尊十一面観世音は高松女御の守本尊を奉納安置された由緒があった（花巻古事記）からこの鞍掛に移転再興を決定された・その再興の年代は天保六年（一八三五）書いた二郡見聞私記に高松寺境内に植えられた諸木の樹令から見て三四百年前に再興された様に見えるとあるから四百前とすれば足利義の文明十七年（一四八五）頃となる・

然らば再興の主力となった・大富豪は誰であったらうか、昔から口碑に残っている鞍掛山立岩が崩れても、柳田家はゆるがないと云はれた、大富豪柳田家であったかも知れない

六、再興後の高松寺及観音堂

高松寺は、鞍掛に移転再興以来、明治初年まで栄えたが、其間に高松寺に関した記録としては、天正十八年（一五九〇）秀吉が小田原城を攻めた時、それに参加しなかった領主は、皆領地を没収された・稗貫の領主稗貫廣忠も領地を没収されたから、逃げて矢沢舘に隠れて居た・文禄三年（一五九四）二月廣忠高松寺を訪れ　四方山の話の序でに、住職法印に向ひ、この頃よい夢を見たから花巻城に帰る様になると思ふといった・法印はどう云う夢かと聞きかえすと

只頼め真如の道ぞ有がたき立帰るべき時は来にけりという・歌を告げられたと答へた・法印は当座では・おめでたいと云ったが・廣忠帰ってから不吉な夢を見られたといった果して間もなく廣忠は卒去された・（和賀稗貫郷村誌）

又南部利直の時　鍋倉にあった・万福寺を花巻に移し、慶長十六年（一六一一）八幡寺と改称軍事要害地であるから、和賀、稗貫両郡の鎮守として、軍神愛宕を勧請した・こうして愛宕山八幡寺を開創してから・高松寺を其下に属させたとある（花巻市古事記）

そして明治初年に至り、排仏毀釈の神仏混交を禁ぜられ、鎮守の白山宮のみを残して廃寺となり仏像、弘法大師と・興教大師は矢沢の大畑に移さ

れ、不動明王と地蔵菩薩は宝昌寺に移され、前机は矢沢の疱瘡神社に移された。茶の湯釜は、川村健二氏の手に入り、秘蔵されている

現在の観音堂は元は三間四面であったが、昭和二十三年に一間半四面に改造された。本尊十一面観世音は、座像で蓮台共三尺八寸五分あり、徳川初期の作といわれている。

七、経ヶ森

高松寺には、一字一石の経塚あり、鞍掛の高松寺には、経ヶ森がある。それは高松寺の東方に田を距てて、真丸い森はそれである。天保六年（一八三五）に、誉いた・二郡見聞私記に経ヶ森のことを左の様にいって居る。

観音堂並に寺を今の鞍掛に移すこと年歴知れず寺内の諸木を見るに　三四百年以前と見えたり

又鞍掛の坂の上より東を見るに、真丸なる山あり　之を経ヶ森といふ、昔高松寺繁昌の節、この山の頂に法華経一石一字書写して納めし処なり、依て経ヶ森と云ふとあり、この山の続き、西北の山下に矢沢村立石の金右門といふ者の別家に助四郎というものありしが、手跡算術も相応にて用ひられし男なり、寛延初年（一七四八）の頃とや大雪の夜出家一人来たり宿を乞ひけり

やすき事とて様々もてなしければ　終夜有がたきことを説きしらせければ、その夜あかしけり、翌朝飯後、茶を飲み、雪もはれければ、暇乞して立ちけるに門前へは出てずして、山の手に行きければ、助四郎申すには、さ様にお出候へば経ヶ森へ上るなり　一向前へは、道なき処なり　門前へ御出で大道をおこしあれと申しければ、大道へ出候も雪をふむ、戻るまじとて行きけり、助四郎せん方なく　出家の行えを見届けけるに、何やら光物眼にさはると覚え眼をふるまゝに、出家は見えず、足あとを見るに　山の平半途まで上へも、脇へも足あとなしとぞ」

八、高松寺の住職

最初の高松寺の住職名は、全然知るよしもないが、再興後の住職も亦詳かでない、徳川時代になって　後代の住職は、幸い観音の五枚の棟札によって知る事が出来た、その中最とも古いのは宝永

五年（一七〇八）で宥栄という住職であった・次は元文四年（一七三九）三月再建の棟札に別当法印光玄とある。光玄の位牌は残って居て、表面には梵字阿字の下に法印権大僧都光玄不生位とあり、裏には延享元年（一七四七）子四月十九日高松寺春ア房とある・これは没年月日であろう・光玄の師匠か先住かに宥尊という碑がある。寛政元年（一七八五）及寛政十一年（一七九九）には宥育文化九年（一八一二）には宥嚴次に嘉永二年（一八四九）まで宥嚴の弟子宥密其次は宥密の弟子尭伝次は尭伝の弟子で明治に至り　高松寺廃寺とあり復飾して神官となり高松定登といい白山神社の祭主となった。

宥密法印は、寛政七年（一七九五）矢沢の小倉掛中島家に生れ高松寺宥嚴法印の弟子となり、勉学修行共に優れ、人望ありて師宥嚴の跡をつぎ高松寺の住職になった。五十一才の時、阿闍梨法印の位を受け、五十五才嘉永二年（一八四九）四月十四日和賀稗貫の真言宗の総寺八幡寺の住職に栄転した・後缶の妙泉寺に転じたが、明治四年九月一日七十七才で生家小倉掛に於て没した。

宥密師の着用した袈裟及乗駕籠、文書等が中島家に保存されてある。宥密の弟子尭伝も高松寺住職から八幡寺住職になったが、優秀な学才をそわめられて毒殺されたということである。

八幡寺住職宥密の前の住職は宥遠と云ふ人で、この人も妙泉寺に転じ、それから成島寺に移ったそのあとに宥密は妙泉寺に転じた、又宝永五年当時の高松寺の住職は宥栄といふ人であるが、この人は成島寺に転じた様である。成島寺に阿弥陀像（現在毘沙門堂にあり）の体内に承徳二年（一〇九八）十二月十日造とある仏像を享保五年（一七二〇）に修禮して背の蓋の内面にその修禮の理由に詳しく書いて、

『當山頭橋大僧都法印了然房宥栄』と記している。はこの人であらう・又南部家蔵『寺社』一の巻に、

安永八己亥年（一七七九）九月七日　八幡寺

此度江戸鰐頭弥勤寺江法用之儀御座候ニ付末山高松寺使僧為差登申度矣間御暇被下置度尤高松

寺儀田舍報恩講数年相勤矣ニ付初瀬表江為入家学業之登山仕度之旨願出申候依之江戸表用ニ付初瀬表江為入家学業之登山仕度之旨願出申候依之江戸表用事済次才直ニ初瀬登山仕度様明後年春迫御暇被下度旨申上願之通被仰付寺社御奉行江申渡矣也

とあり又同「寺社」二の巻に

安永十年（一七八一）辛丑年三月四日八幡寺當寺末寺高松寺儀九月為家入学之初瀬登山之儀願上當春迫御暇被下度処末伝法修学相済兼只今罷下度而も年数未満ニ而出世成就与申ニ毛難相成旨間明後年春迫在山伝法御暇被下度旨以末書永福寺申出願之通被仰付寺社江申渡矣

とあるは宥密の師匠宥嚴の初瀬登山伝法修業の時の願出で当時は高松寺は八幡寺の末寺とされていたことが分かる。

九、高松寺の復活

高松の人渡辺宥京師は、青年の時より、[illegible]高松寺の復興を志し、先づ五大堂勝行大僧都赤塚宥天師の弟子となり、真言宗醍醐派を修行し、大正十四年十月二十五日高野山管長大僧正泉知等師より授花得仏大日如来忍海受明灌頂を受け、昭和三年六月九日御大典祝特入峯参加修行

それより大いに布教に従事四方より、善男善女が詣る様になり幽邃清浄の地を高松部落の内に選び大正七年三月御堂建立如意堂教会を設立して、その会長兼担任教師となった。昭和九年十月十六日真言宗醍醐派修験道常務支庁管理を特任された

昭和二十一年十一月二十五日高松寺公称を許可され　同二十四年六月十五日平和子育観音像を安置した。昭和二十七年十一月十日には高松寺として、本堂三間四面九坪敷地三十坪庫裡二間半に五間二階建て二十四坪五合宅地六拾六坪となり、之を登記した。而して同月同日宥京師権少都に任命された。同二十八年六月二十一日弘法大師並に理源大師を安置し又古仏像も花巻城観音寺にあった弘法大師、丈尺八寸を盛岡市蓮正寺より譲受け（昭和二十年七月八日）又大正五年二月九日不動尊丈三尺を志和村黄金堂より譲受けて安置した。

次に本堂の周囲も亦自然の山林と、岩石湧水あ

りて四季の風致を添え、参詣の信徒をして、世の悩を散じ清涼な仏性を悟らしむる尊とい、道場の適地である。かくて月々年々宥京師の熱誠なる布教功を奏して、現在二百有余の信徒を得、古霊場高松寺の復興を見るに至った。将来益々発展と繁栄とを予想されている。

一〇、東禅坊の伝説

其一　昔高松寺の小僧に、宗元というものがあった。性質愚鈍で、学問をきらひ同輩の小僧達は学問が進むのに、宗元ばかりはいつまでたっても進まない。宗元思ふ様同輩は遠からず、立派な和尚様になるだろうが、羨やましい。われも何か他人の及ばないことをして、名をあげたいと、山上の観音様に願をかけ、我れに大力を授けたまえと百日お参りして、お祈りをした。処が満願の日に夢のお告げを蒙り大力を授かった。同輩や諸人はそれを知らず、例の通り、宗元を笑ったり、なぶったりした。処が宗元はいつもの様に腹を立て、一寸宗元の手がさわったと思ふとすぐ打倒れて半死半生の苦しむ状態となった。又いかに大力なものでも、宗元には勝つものがなくなった。それより諸人恐れて、笑ふものも、からかふものもなくなり、それにつけても、宗元は日にまし乱暴になり、諸人にきらわれて、誰れも相手にするものがなくなった。宗元も居たたまらず、仙北へにげてしまった。仙北でも嫌われてこんどは、北国加賀の石動山に行ったところそこに東禅坊というあき寺があったからそこに住んでいた。乱暴なため、そこでも人にきらわれて越前の三国の港にいた。こゝでも手荒いことをしたので諸人に嫌われこれを生かしておいては妨害になるからと密かに想談して四月八日の花見に誘ひ出し、皆で飲めや唄への酒もりをした。東禅坊元よりの大好の酒なれば大盃を重ねること数知れず、足元もよろくに酔ってしまった。その時二三人立って、岩の端に立って海を眺め、沖の舟を数え争ったが、他の人々もそれにならって、舟を数え争った。その岩の下は百丈もある　屏風をたてた様な崖であった。東禅坊も何気なく人をおしわけて岩の端に立ったその時かねてしめし合せていた数人どっと後ろから

つき落した。東禅坊後ろの者を右と左にさらって共に海中に落ちて沈んでしまった。その東禅坊の亡魂風となって、毎年四月八日前後に、吹きあれて漁船も商船も害を蒙ることと度々あるので東禅坊風と恐れられる様になった（和賀稗貫郷村誌）

其二

三月二十五日は紫波郡高水寺の鎮守天神様の祭日で年々参詣の諸人郡集して、大盛りのよしなれば、高松の宋元も参詣にいって見た。頃しも境内の櫻の花今を盛りと咲き乱れ諸人あかず眺めあるいた。宋元人の見め間に一抱えもある櫻の木をねじまげて、その上に腰かけていた。眺めあるく人々もそこえ来ては、まねをして、腰をかけるもの多く、又子供らはわれもわれもと枝によじ上り大勢で遊びたわむれていた。大分人々が集まって取りついた処を宋元さらりと腰をはずしたので、その櫻の木元の様に勢よく起き直ったから、何んぞたまらん木に取りついた大勢の老若男女は中天にはねとばされ、花諸共落花と散り乱れた。それを見た宋元のみほくほく喜んだといふ事である。

（あづま昔物語）

（以上昭和三一、九、九、小原無学調）

高松寺十句　小原無学

神宝は出土の白磁宮涼し　岩根神社
夕焼の後光志願の窓にさす　志願の窓
男松女松涼風に仰き笑はたつ　男松女松
峯涼し六根清浄松の声　高松山頂上
霊木を語り継ぐ松風涼し　灵木高松の跡
緑蔭や磐石に建つ新精舎　新高松寺
初櫻映れば小鵜清水かや　小鵜之清水
葉櫻の影もにほふや鵜清水　〃
とき清水櫻紅葉の浮くもよし　〃
炎天の峯案内の九十翁　（渡部直吉翁）

高松石の鳥居

（高松村松の大木の事）

横川融三

高松村石の鳥居は旧観音堂山の上にあり、土俗相伝、むかし此の山の頂に高き松あり、枝葉一村に延びて青空を蔽ふ、其松精霊あり、祈願応ぜずといふ事なし、遠近の諸民石の華居を立て参詣群集す、何か子細ありて松の精霊、帝闕に災す、勅宣有て此松を伐らしむ、人夫かはるがはる剪に切口一夜の内に合して元の如くに成る。奉行不知して昼夜となく頓て人夫かはるがはる伐らしむ事深更に及ぶ時は、いかんとしても眠けさして鋸を上る事ならず、奉行も共に眠りける。或る夜奉行の夢に楼閣高大なる殿に白髪なる老人不例のよし、介抱の諸臣左右に群候す、次には諸山諸道の高木見舞のよしにて列座也、奥より雑掌と覚しき者、帳面を持来り、次第に呼かけ様体を向ふと見へたり。遥か末座に控しは奏者今かと待体也。雑掌これを遠見して呵りけるは、汝たらの木の分として其病体も軽からず。御目通へ出る事不届者、はやく立去れと呵りけり、たらの木、萬木の目の前にて面目を失ひ、すごすごと立て失しと見得しが夢覚めたり、翌日奉行又とろとろと眠りけるに、夜前見したらの木罷出ひざまづき申けるは、私儀は此山に住むたらの木にて候、日本開闢此山に諸木と隔てなく生を同じうして住みけれども小は大に及ばず、此処にて大松を主君の様に、崇み時々出仕つかまつり候、此間大松禁庭へ背く事有之よしにて、御伐らせらるゝに依って、私も昨夜諸木と共に見舞に出しか、諸木の前にてはづかしめを得たり、然といへども外に刃向ふべき手段もこれなく、依てこの一大事を告て薦憤を晴さん、抑此松を伐る事中々幾年伐るとも伐り尽すべからず、是を伐り倒し給ふには、伐取し松のこっぱを籾糠にて焼捨候得ば、只今の様に切口合する事ならず、又切口へは塩をふりかけ給ふべしと語ると思へば夢覚けり。奉行大に喜び教の如く人夫に下知して伐りければ、漸々廿日にて辰巳の方へ倒しける。此の松の倒れたる先は仙台境に松先（松崎）とてあり、宮田村にあり、高松村（松先村？）といふもこのいはれなり。松の根朽失せたるによりて、高松の生したる山上くぼみてあり、石の鳥居は生れたる所は、生くるまま死したる所は風雨にかけ崩れ鳥居の形計り残り、今は名のみの旧跡なり。

（二郡見聞私記）

附

◎伐り倒した灵木高松の先きが、届いた所を松先き、「松崎」と云ひ（現在東和町浮田地内松崎）だと伝へ

◎中間が切れて亡（な）くなった所を「仲無（ナカナイ）」（東和町中内）と中内と伝へ

◎此の分は宮野目の「似た内」で発見したが是れを問題にすれば犯人が出る事を懼れ、似て居ないと申し立てたので「似た内」と云ふのだと云ふ

◎灵木高松の伐採に当り、切り屑が元に帰り、どうしても切れないで困って居る時、タラの木の進言を用いた所切り倒し事か出来たのであったが、其の灵木高松の根に因て以来タラの木が大木となる事が出来なくなったのだと云ひ伝へられる。

次に「此の灵木高松」の伝説を「岩手の民話」「タラの木の言葉」として次の様に民話風に記るされて居る

タラの木の言葉

稗貫郡高松の観音堂のいただきに、むかし、すばらしく大きな松の木がありました。この木のために、はるか西の花巻では、朝日の出るのがおそく、東の土沢では、日の暮れるのが早いとさえいはれたほどでした

そのころ、都は平安京（今の京都）にありましたが、あるとき天皇がふしぎな病気におかゝりになりました。まよ中になると、東北の空から黄色の粉が一面に御殿にふりかかるとみるまに、何ものかにうなされて非常にお苦しみになるのです。

名ある医者が手をつくして介抱申しあげ神主や僧侶が神仏に祈願をこめても、少しも効果がありません。ところが陰陽師安倍晴光のうらないによると、これは都のうしとら（東北）の方角にある国の、松の大木のたたりだということになりました。そこで　京都の東北にあたる国々に命じて、松の大木を探させましたが、ついに高松の大木がこれにちがいないということになりました。そして、すぐ切り倒すようにと命令が出されました。

鎮守府将軍から命令をうけて、この木を切る大役をおおせつかって肥沢の城から派遣されたのはオジカのスクネ（雄鹿の宿弥）という若者でした

スクネは、はじめてこの大松を見たとき、からだのすくむような恐しさを覚えました。さらに、近くの村から人夫を集めようとしても、松のたたりをおそれる人々は、誰一人として進んで出ようとする者もありません。仕方なく、スクネは肥沢に帰り人夫を集め、ふたたび高松にやってきました。しかしいよいよ木を切ることになると、何も知らなかった人夫どもも、村人から木のたたりを教えられると、にわかにしりごみをして、逃げる者さへ出てきました。スクネは残った人夫を励まし　自分も先頭に立て木を切りはじめました。ところが思いがけないことがおこりました。

この大木はふつうの松の木とはくらべものにならないほど固いものでした。それでも才一日には根もとのまわりを一尺ほど切りこんだのです。ところが、二日目の朝、木のまわりに集ったスクネと人夫は、自分の目を疑ふほど驚ろきました。昨日切ったはずの切り目は少しもなく、一夜のうちに木はすっかり元どおりになっていたからです。あたりにちらばっていた木の切りくずが少しも見当らないのもふしぎなことでした。

三日目の朝も、同じことでした。人夫どもの恐怖は大変なもので、ここでまた逃げる者が出て、残る者はわずか六人になっていました。スクネも異様な恐怖におそはれましたが、それとともにこの妖怪じみた木をあくまで切り倒さうという烈しい敵意をもえたたせました。そこで、六人の人夫を手わけして、夜も交代で木を切りつづけることにしました。ところが、深夜、自らもおのを持て木に打ちこんでいたスクネは、にわかに烈しい眠気におそわれました。人夫どもはすでにそこに倒れて昏々と眠っています。これではならぬとスクネは一応に眠気と戦いましたが、とうとうどろ沼に引きこまれるように正体もなくそこに倒れて眠ってしまいました。ふと目がさめてあたりを見まわすと、そこは広い御殿のようでした。あたり一面きりがかかったようにぼんやりしている中を、

スクネはしだいに見わけてゆきました。ずっと上座の高い所に、白髪の老人が寝ていました。老人の病気が重いらしく、これだけ多くのものがいるのに、この御殿をつつむものは、葬式のように沈んだ空気でした。

やがて奥から一人の書記のようなものが出て来て、何か名前のようなものを読み上げます。スクネにはそれが、「やまとの国かすが山大杉どの」とか「やましろの国おだぎ山やま櫻どの」ときこえた。すると名を呼ばれたものは、音もなく立ちあがり、広間から上座に進んで正面の病床の老人にうやうやしく見舞いをするやうでした。

はて、この老人は何者か、とスクネが考えこんでいますと、にはかに広間の中でふしぎなことがおこりました。名前を読みあげていた。あの書記のようなものが、広間のうしろの方に何を見つけたのか、大きな声をあげたのです。

「お前はタラの木ではないか」

そこには、他のものとちがってみすぼらしくやせ細ったものがすわっていました。先ほどからおどおどくと落着かないようすで、一番末座で自分の順番を待っていました。

「タラの木のようにいやしい分際で、よくもめけぬけと御殿に入ってきたな」

書記の烈しい怒声に、満座のものはいっせいにふりかえってそのものに目をそそぎます。タラの木ははずかしそうにその顔を伏せていました。

「お前のようないやしいものが、どうしてお目通りがかなうものか。かえって御病気の障りになる。早く出てうせろ」

タラの木は、そのやせ細ったからだをガタガタとふるわせながら、消え入るようにすごすご広間の外に出て行きました。

と見るまに、スクネはパッと目をさましました。あたりは朝の光がさしていつのまにか夜が明けていたのです。松の木は、やはり元のように切り口がなくなっていましたが、スクネは、昨夜の夢の中の病気の老人がこの松の精ではないか、と思いはじめました。あの夢が木々の世界のことを示すものとすれば、この大松もそうとう弱ってきている

にちがいない、とも考えました。

そこで勇気百倍して、その夜も切りつづけました。ところが、深夜になると、やはり眠気がしてまたとろとろと眠ってしまいました。すると、その夢の中に、昨夜御殿から追い出されたあのタラの木が、スクネの前にあらわれました。そしてスクネの前にひざまずくと、どもりながらふしぎなことをいいだしました。

「私はこの山に住むタラの木でございます。この山に生をうけて、ほかの木と同じようにこの山の主の大松に仕えてまいりました。このたび大松が天子様にそむいて、いよいよ切り倒されるようになったとのこと、そこで私は昨夜見舞いにあがりましたが、満座の中でひじょうなはずかしめをうけました。この恨みは何んとかしてかえしたいと思いますが、力の弱い私には何もできません。そこであなた様におわがいしたいことがございます」

スクネがうなづきますと、タラの木はその細い目を斜めに見開いて、

「あの松は、何年かかっても、今のやり方では決して切り倒すことはできません。切り倒すためには、あの切りくずをモミヌカで焼き捨ててしまうことが必要なのでございます。そして、切り口にシオをふりかけると、もう決して切り口が元通りになることはございません。どうか私の申し上げたようなやり方で、あの大松を倒して、私の恨みをはらして下さいませ」

そこまでいって一礼したかと思うと、タラの木の精は、すっと姿を消してしまいました。夢からさめたスクネは、昨夜の夢と思いあわせ、これは決して一時の気の迷いではないと思ました。その日からタラの木の言葉のとおりしますと、仕事はどんどんはかどり切り口が元通りになることもなく、その日から二十日目にはさすがの大木もついに切り倒すことができました。木が倒されると、都の天皇の御病気もお治りになりました。オジカのスクネにはいろいろと恩賞の沙汰がありましたが、スクネはいっさい辞退して、高松に小さなお堂を立て、自分が倒した大松の霊を慰めたといわれます。

「岩手のむかしばなし」

今様花咲爺的な噂咄が廣く行はれて居るので、くどい様だが、仔細に説明を加へた次第であった。

尚ほ谷内経塚の発掘に就いて追て主任の山本貞三氏が「経塚発掘調査報告」が出ださるる事と思うので其れに就いて研究される様御勧めします。

一九六一、一〇月

編輯後記

一九六二年を迎へました事を御慶び申上げます

今年も倍旧の御指導下さる事御願い申します

本叢書も今輯を以て三四輯となりました、偏へに会員各位の御支持の賜と厚く御礼申上げます、実は今輯は昨秋中に発行し、旧年内には第三五輯を御届けする予定でしたが、今漸くにして第三四輯を御届けするに過ぎなかった事をお詫びします。

尚ほ本会の経営も時節柄頗ぶる困難であります

一層の御援助の程を御願い申します

尚ほ、古文書類の調査、収集、伝説、其他資料等を御寄せ下さる様御願い致します

一九六二年一月　編輯子

猿ヶ石叢書第三十四輯
昭和三十七年一月廿日（頒価一部七十円）
岩手県東和町東晴山
横川融三方
発行所　土沢郷土研究会
（岩手史学会土沢支部）
印刷　東和町上町　小田島幸一

猿ヶ石叢書

第三十四輯

土沢郷土研究会